

[008]ポリモルフィア表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7347997>

出版情報：ポリモルフィア. 8, 2023-03-24. Office for the Promotion of Gender Equality, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

第5回 EAJ ジェンダーシンポジウム「イノベーションと多様性」

玉田 薰

九州大学ダイバーシティ担当副学長

男女共同参画推進室 副室長

日本工学アカデミー（EAJ）ジェンダー委員会委員

ジェンダー平等を含む多様性の確保は、持続可能で健全な社会を創造していく上で必要不可欠である。多様性への意識の醸成がなかなか進まない日本社会は、グローバル社会でリーダーシップをとっていく上で大きなリスクを背負っている。日

本の社会が変わるためには何が必要か。－ この問題提起を軸に、2022年5月6日（金）第5回日本工学アカデミー（EAJ）ジェンダーシンポジウムが、九州大学/文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（調査分析）」との共催でオンラインにて開催された。

第一部では、数学者であり、総合科学技術イノベーション会議議員、国際学術会議（International Science Council）の次期会長でもある東北大学理事・副学長小谷元子氏と、独立研究者、作家、パブリックスピーカーとして著名な山口周氏を基調講演者として迎え、この問題について議論をした。第二部では、講演者2名にEAJ若手委員会委員長の大阪大学教授、関谷毅氏が加わり、「イノベーションと多様性：その本質について考える」として公開討論を行った。

本シンポジウムの開会挨拶は日本工学アカデミー会長小林喜光氏、総合司会はEAJジェンダー委員会川村みどり委員、ファシリテーターは中村淳委員ならびに玉田で、九州大学/文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバー

[illegible]

シティ研究環境実現イニシアティブ（調査分析）」との共催にて開催した。

多様性は科学発展の駆動力

「多様性は科学発展の駆動力」というタイトルの小谷氏の講演では、多様性に関するさまざまな問題は、教育、経済、ジェンダーなどをばらばらに議論するのではなく包括的に捉える必要があること、国際社会における多様性の議論は、現在「科学における自由と責任」に焦点が当てられていることなどが紹介された。また日本の場合、ジェンダー平等に加えて国際化の立ち遅れが社会に大きな影を落としており、早急な解決が必要であるとの見解が示された。そして、科学のフロンティア形成には、定常状態を崩す何らかのダイナミズムが必要であり、多様性こそがその機動力となると述べられた。

心理的安全性の確保なしでイノベーションは生まれない

「クリエイティブアドバンテージ：創造性優位の経営とは」というタイトルでの山口氏の講演では、日本におけるジェンダーの問題は、ある意味分かりやすく氷山の場所を示すもので、実際にはその奥にさらに大きな問題が潜んでいること、その問題の一つが昭和型の組織構造にあることが述べられた。同質的な組織では経済的価値を生み出すような独創的なアイデアは生まれにくい。そして、パラダイム転換を成し遂げる人間は年齢が非常に若い、その分野に入って日が浅いかのどちらかである、などの示唆的な海外の事例が紹介さ

れた。また縦社会における権力格差は日本をはじめアジアの儒教国で高く、プロテスタントの国では低いこと、イノベーションランキングの上位は後者の国が占めること等が紹介された。イノベーションには多様性は欠かせないが、「心理的な安全性」が確保されないところで意見や行動の多様性は生まれない。すなわち個の尊重への理解がイノベーションの土壌を作る上で極めて重要であることが述べられた。

多様な評価指標を持つことが重要

第二部では、EAJ若手委員会委員長である大阪大学の関谷毅氏にご参加いただき、約1時間の総合討論を行った。関谷委員からは、若手委員会主催の公開シンポジウムでの議論の紹介と、そこから得たスタートアップエコシステム実現への展望が述べられた。続く総合討議では、日本の社会が変わるためには一体何が必要か、という問いに対して、山口氏からは、新卒一括採用（一律な人材評価システム）の問題点が指摘された。また小谷氏からは、海外への頭脳流出の末にドイツが着手した大学人事システム刷新を例に、日本においても女性ならびに若手研究者にとって魅力ある社会の構築を急ぐべきとの意見が出された。その後、大学の入試改革や工学教育の問題に関する議論を経て、人材評価システムの話題に戻ったが、イノベーター創出には、学歴や実績だけによらない「多様な評価指標」を社会が持つことの重要性が改めて指摘された。

最後に、ジェンダー平等に関して、山口氏から、男女間の性差認識を示す「男らしさ/女らしさ指数」が世界と比較して日本において極めて高いこ

とを例に、組織やコミュニティにおける位置付けで個を評価しがちな日本の社会の問題点について再び指摘があった。両講師ともに、我々が所属する社会や組織に許しがたい問題があった場合、まずは「おかしい」と意見を出すこと、しかしそれでも組織の考えが変わらない場合には、問題の重要性を認識してもらうために、場合によっては他組織に移るなど何らかのアクションをすることが時には必要である、という意見を述べられた。

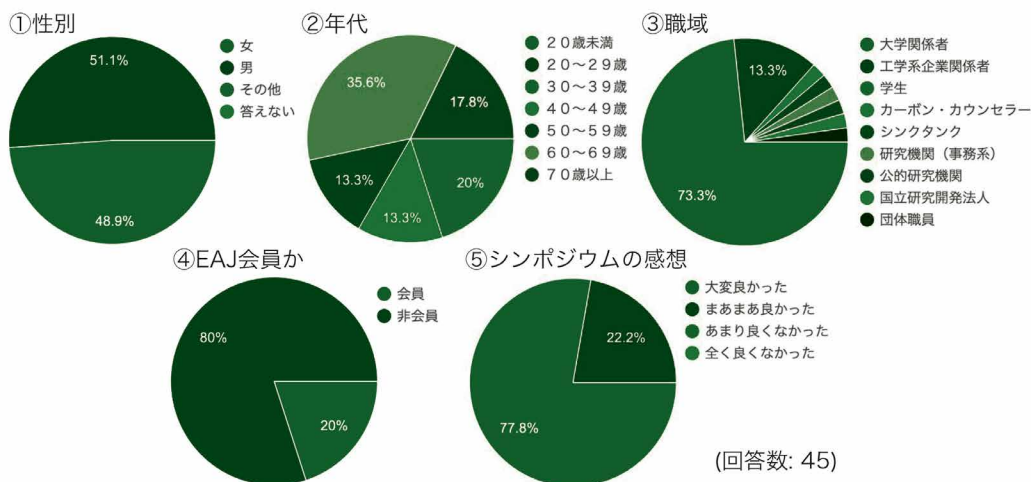
シンポジウム後のアンケートでは、良かったとの回答が100%の結果となった。「グローバルな目線での講演で色々な気づきがありました」「このように考える政治家や企業トップが増加することを期待します」「ここ20年のもやもや感に一つの答えをもらったように感じました」「違った視点で物事を見ているようでありながら、帰着点が同じになる事が面白く感じました」「それぞれの

発言を興味深く伺いました。根深さと幾分かの可能性も」といった率直な意見が寄せられた。連休中の開催にも関わらずシンポジウム開催に向けてご協力いただいた皆様、100名を超える聴講者の皆様にこの場を借りて感謝する。

追記：多様性の本質は「個人の尊重」

組織にダイバーシティ・インクルージョン・エクイティ（DEI）推進を定着させるには、なぜDEI推進が必要かということを構成員がきちんと理解することが極めて重要である。特に学生の教育に携わる大学組織の場合、「国や政府の方針だから女性の数を増やさなければいけない」といった理解では全く不十分である。学生に正しく教えられるように、社会におけるDEI推進の意義について、教員が理解を深めることはこれからの大学においては必至といえるだろう。

アンケート回答（抜粋）



昨年度のダイバーシティ推進トップセミナー「変容しつつあるジェンダー概念の理解にむけて」で学んだように、そもそもヒトの性は男女に明確に二分できるものではなく（100% 男性や100% 女性は存在しない）、個々の人間は性染色体や肉体そして脳の構造的にも男と女の間を連続的に変化するスペクトラムのどこかに位置し、そしてそれらは一人の人間の生涯の間にすら変化する。つまり、人間の性はそもそも「多様」なのである。

近年ニューロダイバーシティという概念が注目を集めているが、これは脳や神経に由来する様々な人間の特性の違いを多様性（個性）と捉え、それらの違いを社会の中で活かしていこうという考えである。これらは発達障害への理解を深めるために使われることが多いが、発達障害もまた近年スペクトラムとして捉えるべきとの理解が進んだ分野である。

つまり、すべての人間は複雑で多様であり、複雑で多様であることに価値があり、単純に分類・区別され決め付けられるものではない。ジェンダー平等も然り、これらは全て「個人の尊重」（一人ひとりをかけがえのない存在として大切にする）に関わる重要な問題である。シンポジウムのテーマに戻ると、多様な人間が住む社会において、新たな価値を生み出す活動であるイノベーションが、関わる人間の多様性を確保せずに進むはずがない。それを改めて確認することができたシンポジウムであった。

九州大学 QURIES プログラム令和4年度実施報告

杉本めぐみ

九州大学男女共同参画推進室 准教授

プログラムの目的と社会的意義

令和4年度8月に女子高校生の理系インターシップQURIESプログラムを伊都キャンパスにて初めて対面で実施しました。令和3年度に女子高校生を対象とした本学理系インターンシップ制度「QURIESプログラム（以下「本プログラム」）」を新設したもので、本プログラムの名称は、K(Q)yushu University Research Internship in Engineering and Science と、女性科学者のパイオニア、マリ・キュリー（Curie）博士の名前とを合わせたものです。

本学は本プログラムを通じ、広く女子高校生の理系分野への興味・関心を喚起して裾野を拡大し、学術研究の将来を担う優秀な若手理系女性研究者・技術者を長期的に育成し、九州から世界へ羽ばたく女性を一人でも多く輩出する支援を行います。対象は、大学進学前の意欲に溢

れる優秀な女子高校生で、本学の先端的な研究環境の一端に触れる機会を提供するとともに、本学理系分野の教員をメンターとして、座学ではわからない刺激的な研究活動の体験の場を提供します。なお、本プログラムは、世界的に著名な科学者で、かつ若手女性研究者の支援に尽力されてきた本学の名誉教授であった故伊藤早苗元理事のご遺族からの寄附金で運営しています。

本年度の実施概要

今年度は13校28名の女子高校生が8月6日のオリエンテーション後、8月17日から各研究室に1週間配属されて研修を受け、最終日の23日午後から受講生による研究活動報告会を行いました。



玉田副学長の講演



ラボ見学



顕微鏡見学

まず、オリエンテーションでは、玉田薫副学長（男女共同参画推進室副室長）から挨拶の後、萩島理副理事から本プログラムの説明を受け、若手研究者2名による講演を聴講しました。その後、工学部にご協力いただき、受講生が応用科学部門実験施設と機械工学部門実験施設の2つ研究室と超顕微解析研究センターを訪問しました。担当の研究室の研究者やTAから説明を受け、女子高校生からの質問に回答していただきました。

さらに研修実施期間は8月17日から23日の土日を含め5日間で、19研究室の教授以下研究者、学生、技術職員の方に指導や受入れにあたってお世話いただきました。受講生に与えられた課題に対して、1年生から3年生までのそれぞれのレベルに応じた指導を受け、研究を進めました。研究室に自分の席をもらい、研究室のメンバーと一緒に学食を食べる受講生がおり、充実して楽しそうに過ごしている様子が伺い知れました。



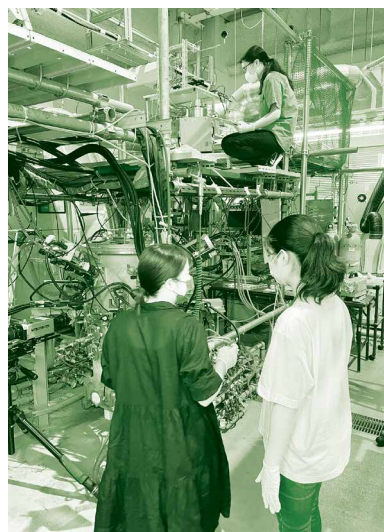
重力計のレクチャー



スパッタ装置前



TAの指導を受ける受講生1



TAの指導を受ける受講生2

最終日の報告会では、2つの会場に分かれてパワーポイントを使い、オンラインと対面のハイブリッドでの活動報告を行いました。各研究室から指導いただいた先生やTAが参加くださり、研究内容のコメントや今後の励ましなどをもらうことで、より意義のある報告会となりました。受講生

も積極的に質問し、活発な議論を行うことができました。濃厚接触者となり対面がかなわないなど、新型コロナウイルス感染症の影響もありましたが、自宅からオンラインで指導や発表を行うなど工夫することで、受講生全員が本プログラムを終えることが出来ました。



萩島副理事の挨拶



報告会第2教室



報告する受講生



オンライン参加学生と司会の杉本准教授

アンケート調査と受講生の報告をまとめる形での実施報告書を今年度も作成をしています。参加者からは「初めて」、「新しい経験」「たくさんを知った」、といった言葉が寄せられ、これまでにない経験をしたことが分かります。さらに、

研究の扉を覗いたことに対して「楽しい」、「面白さに気づいた」、「難しかったけれど興味の幅が広がった」、「貴重な経験」といった沢山のポジティブな感想が寄せられています。

また、未来に向かって「経験を活かしたい」、「工

学の道を進めるようにこれからも努力したい」、これらの結果を踏まえ、さらに本プログラムを
「将来の糧になった」、「夢に向かって羽ばたきたい」発展させていく予定です。ご協力頂いた関係者の
い」という言葉からも充実した研修を送れたこと皆様にお礼申し上げます。
が伺い知れました

令和4年度九州大学 QURIES プログラム 受講生一覧

受入研究室 代表者氏名 (職名)	所属 (学部担当)	参加者所属校	受入 人数	演習 場所	
渡辺 隆行 (教授)	工学研究院 (工学部化学工学科)	福岡県立筑紫丘高等学校	1年	1名	伊都 キャンパス
三浦 佳子 (教授)	工学研究院 (工学部化学工学科)	福岡県立修猷館高等学校	1年	1名	伊都 キャンパス
土山 聡宏 (教授)	工学研究院材料工学部門 (工学部材料工学科)	九州産業大学付属九州高等学校	2年	1名	伊都 キャンパス
佐藤 幸生 (准教授)	工学研究院材料工学部門 (工学部材料工学科)	九州産業大学付属九州高等学校	2年	1名	伊都 キャンパス
馬奈木俊介 (教授)	工学研究院環境社会部門 (工学部土木工学科)	福岡県立福岡高等学校	3年	1名	伊都 キャンパス
菅井 裕一 (教授)	工学研究院地球資源システム工学部門 (工学部地球資源システム工学科)	福岡県立城南高等学校	2年	2名	伊都 キャンパス
		福岡県立筑前高等学校	2年		
松本 光央 (助教)	工学研究院地球資源システム工学部門 (工学部地球資源システム工学科)	福岡県立筑紫丘高等学校	2年	1名	伊都 キャンパス
工藤 奨 (教授)	工学研究院 (工学部機械工学科)	福岡大学附属大濠高等学校	2年	2名	伊都 キャンパス
		福岡県立筑前高等学校	2年		
林 灯 (教授)	エネルギー研究教育機構 (工学部機械工学科)	福岡県立香住丘高等学校	2年	2名	伊都 キャンパス
		筑紫女学園高等学校	2年		
山西 陽子 (教授)	工学研究院機械工学部門 (工学部機械工学科)	福岡県立香住丘高等学校	2年	2名	伊都 キャンパス
		福岡工業大学附属城東高等学校	2年		
櫻井 幸一 (教授)	システム情報科学研究院情報学部 (工学部電気情報工学科)	福岡県立城南高等学校	2年	1名	伊都 キャンパス
顧 玉杰 (助教)					
伊良皆啓治 (教授)	システム情報科学研究院情報学部 (工学部電気情報工学科、共創学部)	福岡県立修猷館高等学校	2年	2名	伊都 キャンパス
		福岡県立春日高等学校	3年		
湯浅 裕美 (教授)	システム情報科学研究院情報 エレクトロニクス部門 (工学部電気情報工学科)	福岡県立福岡高等学校	2年	1名	伊都 キャンパス
村山 美乃 (准教授)	理学研究院 (理学部化学科)	福岡大学附属大濠高等学校	3年	2名	伊都 キャンパス
		福岡県立福岡中央高等学校	3年		
吉川 顕正 (教授)	理学研究院地球惑星科学部門 流体圏宇宙圏講座 (理学部地球惑星科学科)	福岡県立筑紫丘高等学校	1年	1名	伊都 キャンパス
中島 健介 (助教)	理学研究院 (理学部地球惑星科学科)	福岡県立宗像高等学校	3年	2名	伊都 キャンパス
		福岡工業大学附属城東高等学校	1年		
濱村奈津子 (教授)	理学研究院生物科学部門 (理学部生物学科)	福岡県立宗像高等学校	3年	2名	伊都 キャンパス
		筑紫女学園高等学校	2年		
中村 真子 (准教授)	農学研究院 (農学部国際コース、共創学部)	福岡県立福岡高等学校	2年	1名	伊都 キャンパス
花井 泰三 (教授)	農学研究院 (生物資源環境科学科 応用生物科学コース)	福岡県立春日高等学校	3年	2名	伊都 キャンパス
		福岡県立福岡中央高等学校	3年		
				28名	

令和4年度九州大学若手女性研究者・女子大学院生優秀研究者賞（伊藤早苗賞） 若手女性研究者部門 最優秀賞 研究紹介

『眼と全身の疾患予防につなげるコホート研究』



上田瑛美
九州大学医学研究院
助教

この度は、このような名誉ある賞をいただき大変光栄に思っております。また、この研究はこれまでに蓄積された健診データによるものであり、研究に携わる多くの方々から感謝を申し上げます。

【研究の概要】

疾患の危険因子、防御因子を明らかにし、その予防を含めた総合的な対策を構築することによって疾患を早期に予測・発見することは意義があります。本研究は、一般住民を対象としたコホート研究により、効果的・定量的な予防につなげることを目的としています。

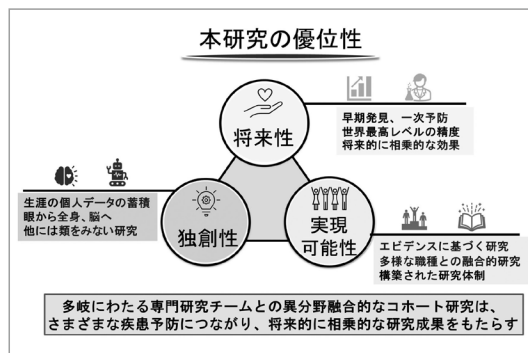
【研究成果】

1. 網膜から認知症の予防につなげる

日本人の地域高齢住民において、網膜神経節細胞層厚の菲薄が認知症と関連することを報告しました。さらに、脳画像データとの解析を行い、網膜神経節細胞層厚の菲薄は脳の視覚領域のみならず、認知機能に関わる部位の脳萎縮にも関連していることを明らかにしました。認知症の早期発見は容易ではなく、脳萎縮の指標となる簡便で非侵襲的なバイオマーカーが求められています。本研究成果は、SS-OCTを用いた網膜神経節細胞厚測定が、認知症のハイリスク群を同定し、認知症における神経変性の過程を評価するよい指標となる可能性を示した重要な疫学的知見です。

2. 網膜から糖尿病の予防につなげる

本研究は、地域一般住民における耐糖能異常と網膜神経線維層厚との関連を解析した研究です。その結果、非糖尿病患者に比べ、境界型糖尿病、糖尿病患者では、網膜神経線維層厚は有意に低値となり、さらに空腹時血糖、食後2時間血糖の上昇に伴い網膜神経線維層厚は有意に低下しました。耐糖能異常なら



びに血糖値の上昇は網膜神経線維層厚菲薄化の有意な危険因子であり、境界型糖尿病の段階から視神経障害が生じていることが示唆されました。網膜厚測定などの眼科検査は撮像時間が短く、非接触・非侵襲的であり、検者間の測定誤差が生じにくいいため、健康診断などの多くの一般住民を対象に実施可能であり、公衆衛生学の観点からも意義が高いといえます。

3. 眼形態解析から眼疾患の予防につなげる

地域住民を対象に疫学調査を行い、近視性黄斑症の増加傾向の要因として、眼球の前後方向に伸長している者(眼軸長)の頻度が多くなっていることを明らかにしました。また、眼軸長と近視性黄斑症の関連を検討し、男性で眼軸長25.9mm、女性で25.3mm以上の場合には近視性黄斑症を有するリスクが有意に上昇することを報告しました。この知見は、近視性黄斑症の簡便なスクリーニング法として眼軸長測定が有用であることを示し、近視性黄斑症の効果的・定量的な予防法を講じるのに役立っています。

伊藤早苗賞の受賞を励みにこれからも梓に捉われない自由な発想をし、眼を通じて患者や社会に貢献する研究につなげることをめざしてまいります。

令和4年度九州大学若手女性研究者・女子大学院生優秀研究者賞（伊藤早苗賞） 女子大学院生部門 最優秀賞 研究紹介

『ナノバブルによる *Pseudomonas aeruginosa* の増殖・代謝促進効果を活用した微生物利用石油増進回収技術の開発』



伊藤美羽
九州大学工学府・
修士2年

この度は、令和4年度伊藤早苗賞（女子大学院生部門）において最優秀賞を賜り、大変光栄に存じます。このような名誉ある賞をいただいたのは、菅井祐一教授をはじめ、教員の皆様のおかげであり、様々なサポートをしていただいた研究室の皆様や学友に深く感謝いたします。

【研究概要】

この研究の目標は、地下に残された石油を、微生物の生成するタンパク質由来の泡で回収することです。本研究では、微生物による泡生成代謝活動の促進要因の特定と、石油回収への泡の有有用性の評価を軸に、同技術の社会実装のための研究室規模の実験を行っています。

【研究成果】

本研究では、*Pseudomonas aeruginosa*（緑膿菌）が、嫌気条件下でタンパク質由来の泡を生成することを発見し、石油回収に適した可能性があると判断し、これを供試微生物としました。

成果1：同微生物による泡の生成は、第一鉄イオン及び二酸化炭素ナノバブル（CO₂NB）によって活性化されることがわかりました。特にCO₂NBによる活性化効果は、そのガス種による特性やNBが持つ電氣的性質など複数の要因が考えられ、



その活性化メカニズムを提案しました。

成果2：同微生物を模擬油層内で培養し泡を生成させた結果、約10%の追加の油回収に成功しました。同微生物による泡は、模擬油層内で大きな流路を閉塞し、全体の浸透率を低下させることでこれまで無かった新しい流路を作ったと考えられます。その結果、これまで流路がなくアプローチできなかった領域の油が回収できたと推察されます。

【今後の展望】

今後は技術の実用化をテーマに、泡の安定性の評価や適した油層条件の想定など、フィールドテストを行うための追加実験を計画しています。

「Open Café 2022 ～九大女子卒業生に聞く！ キャリア講演会」開催報告

杉本めぐみ

九州大学男女共同参画推進室 准教授

2022年11月5日（土）、本学の『アカデミックフェスティバル2022』の一環として「九大女子卒業生に聞く！キャリア講演会 Open Café 2022」を初めてオンラインと対面のハイブリッド形式で開催した。3年ぶりに対面開催であった。Open Caféは毎年ロールモデルとして九州大学卒のOGの方にご講演いただいております、今年で9回目の開催となった。

今年度は、旭化成ファーマで博士研究員としてご活躍の佐藤ひかり氏（システム生命科学府博士課程修了）と、キャスター・気象予報士としてご活躍の佐々木理恵氏（芸術工学府修士課程修了）のお二人にお話をいただいた。

佐藤ひかり氏

旭化成ファーマ株式会社 CMC研究部研究員、
九州大学システム生命科学府博士課程修了博士（工学）



佐藤氏は前臨床・臨床試験の段階にある原薬及び製剤の分析の仕事をされている。九大での充実した学生生活の思い出や、現在の仕事とやりがい

についてお話をいただいた。現在の所属部署のCMCとは原薬・製剤の化学（Chemistry）、製造（Manufacturing）、品質管理（Control）の略で、原薬プロセスと製剤開発、品質管理を統合して実施している。

2010年工学部物質科学工学科に入学し、化学でものをづくことに魅力を感じ、すでに研究職に就きたいと考えていたとのこと。工学部を飛び級のため3年で退学し、2013年に九州大学システム生命科学府システム生命科学専攻に大学院進学し片山桂樹研究室に入った。「皆さんの学科にも飛び級制度があるかもしれないので、興味のある方はぜひ調べてみてください」と学生たちへのアドバイスがあった。さらに、学部生時代には、研究室選別に成績が関係するためレポートや期末試験などの勉学に励み、家庭教師や接客のアルバイト、サークルでタップダンスに打ち込み、応用化学（分子）コースでのいろんな試練を共に乗り越え、遊ぶときは思いっきり楽しめる素敵なお友達と出会えたと話された。大学院では研究に打ち込み、学会発表でポスター賞を受賞する傍ら、研究とは関係のないリーディングプログラム 決断科学プログラムに入って海外経験を積んだことなど、視野を広げ様々なことに意欲的に取り組んだ学生生活の話がされた。



博士号を取得し、入社後については会社紹介をしたうえで、現在の新薬研究開発におけるCMCでの仕事を、探索研究・前臨床試験・臨床試験・承認申請・製造販売のプロセスの順に話された。現在の仕事のやりがいについては、薬1つが患者さんに届くまでに多くの人が関わり、たくさんの知識が積み重なっている。どんなに良い有効成分が見つかって、患者さんに安全に投与できる形にならなくては意味がない。自分の取得したデータがあることで、薬が置かれている開発段階が次の段階に進むことができたときは、患者さんに1歩近づいたとやりがいを感じられる。日々の業務でも他部署や、国内委託先、海外パートナー会社の方々と関わることもあり、自分の提供したデータで感謝されたり、共に1つのプロジェクトを完了させたりしたときに、一助になったと感じていると話された。

仕事の達成感が得られた経験について、委託先で打ち合わせや追加実験を重ねても期待された試験データが得られなかったため、社内の他の部署に協力を依頼し、自ら実験を行い短期間で反応効率が低い原因を特定したことをあげた。試験スペースと器具を借りに行き、試験環境を整えてもらい、操作の習得から間もなく、多数の条件をふっ

て実験を行い、無事スケジュールに間に合わせることができたと話された。

今後の目標は、新しいモダリティ（核酸医薬や細胞医薬といった治療手段のこと）や新しい製剤技術を分析の面で支え世に送り出し、薬を待っている患者さんに届けたい。国内外の有効と見出されたものを、患者さんに届けられるよう、分析業務においても承認申請業務においてもリードできる存在になりたいと専門性の高い研究者らしい目標をあげた。

学生時代の経験で活かしていることとして、分析の仕組みは学生の間に多く学んでおり、学生時代に積み重ねてきた化学の知識をもって、自分で試験法をたてられたり、問題のある試験法の原因解明ができたりすると九大での研究が現在の仕事に結びついていることを実感するとお話しされた。

佐々木理恵氏

キャスター・気象予報士、九州大学芸術工学府修士課程修了



佐々木氏は現在、「おはよう九州沖縄」でニュースキャスターと気象予報士として、一人二役で毎朝生放送に出演中で、九大OGで最も有名な一人である。防災・減災、誰もが幸せに生きられる豊かな社会の実現を目標に、文化・芸術、医療、経済など、幅広く取材も行っておられる。日々放送に臨む姿からは視聴者が知り得ないご苦労や考え、そして思いを率直に語っていただき、高校生や後輩へ何よりも励みになるお話をしていただ



いた。

報道の仕事は、冰山モデルと同じで下準備9割、放送1割で臨んでいる。その現状の説明のために具体的に、放送前の5時半からスタジオに入ってその日の動きやニュースをチェックし、本番を迎えるまでのタイムスケジュールに沿って準備を進めている様子をお話された。放送への思いとして、視聴者が前に進む活力や原動力を得る良い時間を共有し、生きる喜びのある世の中に変えたいこと。約1分10秒のニュースを何を伝え、何を感じてもらうか。その日のニュースは何なのか。深められるところ、印象的な短い一言、社会や人に与える影響は何か。良い社会にするために何が必要か。さらに、4分のリポートの前後30秒で何が言えるか。何を感じ取ってもらいたいのか。気象情報も日々の関心事と同時に、命や経済に大きく関わるため、今伝えるべきことは何かなど。非常に高いプロ意識を持って報道に取り組んでおられる日々の思いを飾らない言葉で率直に話された。そして「自分に嘘のない言葉を。腹の底から一本筋を通す。」とご自身のモットーをお話された。

若い学生向けに分かり易くその時その時の心情をアップダウンで示していただくために書いていただいたキャリアグラフ（ライフチャート）は、

予想以上に乱高下を示し、華やかな放送の世界で真摯に向き合い、熟考しながらキャリアを積んで行く様子がうかがえた。さらに、故・中村哲医師、藤井フミヤさんをはじめ様々な著名人にインタビューをされる中で、力量が試される面白い仕事と感じ、経験を積んでいかれた。特に宇宙飛行士の土井隆雄さんが、好きなことを見つけたら、とことん取り組むとアドバイスをされた。そして、皆さんに共通していたのは、いろんな縁の中で、自分を信じて進んできた。佐々木氏にとって、キャリアとは「轍」。「自分の感性を磨く。予測はできない。自分を信じるしかない。とにかく動いてみることで、わかってくることもある。『意味づけ』は後からで良い。正解はなく、デザインすればいい。道は自分の後ろにできる。作れば良い」とも話された。

また、仕事で大事にされていることや、中学や高校ではしたいことに手を上げ、行動する勇気を持つように心がけてきたこと。九大芸工の音響設計学科の第一志望に合格し、音楽の力の根源に迫りたいという思いを抱きながらも、心動かされているものは、科学的にアカデミックの世界で追及できるのかという葛藤や打ちのめされた経験から、自問自答の日々が始まったことについてもお



話しされた。

さらに、原動力となる好きなものとして、野々村仁清「色絵吉野山図茶壺」、カリフォルニアの太平洋に沈む夕陽やアリゾナ州セドナ、ビートルズを挙げられた。音楽と美術の両方を心に作用するものとして楽しんでいるところは、芸工出身らしく感じられた。分かり易く、聴講者の心を惹きつけるお話ぶりは、若い女性たちに感化を与え、未来への励みとなったと感じている。

後半では、パネルディスカッションが行われ、司会から登壇したお二人への質問だけでなく、参加者からも学生時代の過ごし方やパートナーとの家事の分担など様々な質問が出た。また、元総長の有川節夫先生も参加され、佐々木氏の毎朝の頑張りに対してエールが送られた。

企業の博士研究員とキャスター・気象予報士と、全く異なる職種ながら、お二人とも冷静に自己分析をし、日々の自己研鑽に励んでおられる。その一方で、趣味のダンスや芸術など生活も楽しめる普段の様子の紹介など人間的魅力にもあふれた講師に、女子大学生や高校生へのロールモデルとしても素晴らしい機会になった。講師、松の実会、ご協力いただいた関係者にこの場を借りて感謝申し上げます。

「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」事業の活動について —「先端型」4年目と「調査分析」2年目（最終年度）—

上瀧恵里子

九州大学男女共同参画推進室 教授

はじめに

文部科学省は科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」事業を2015年に開始し、研究環境のダイバーシティを高め、優れた研究成果の創出につながる活動を支援している。九州大学はこれまで3つの補助事業に採択され、既に終了した「特色型」（2015～2020年度）の実績を基盤に、「先端型」（2019年～2024年）、及び「調査分析」（2021年～2022年）へと取組みを発展させている。本稿では現在進行中の「先端型」と「調査分析」の活動状況について紹介する。

1. 「先端型」ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修（SENTAN-Q）

「先端型」は、女性研究者の海外派遣等を通じて上位職登用の一層の推進に対する支援である。九州大学では2019年度に6年間の事業として採択され、総長をトップとする全学体制で「ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修（SENTAN-Q）」を推進している。

1) 目的と概要

SENTAN-Qの目的は、優れた研究業績を有する将来有望な女性ならびに若手教員に対し、世界トップレベルの研究教育力を実践的に身につける

機会を与え、世界と伍して戦える真に実力のあるダイバーシティ・スーパーグローバル教員として育成することである。

研修の具体的内容は、2-3年以内に上位職に昇任することが見込まれる部局推薦の優秀な女性ならびに若手教員の中から、透明性の高い全学の審査会を経て研修生を選出し（STEP 1）、原則2年間の研修を施し、目標レベルに到達した教員には認定書を与え、原則として研修修了後1年以内にテニユアの付与あるいは1段階の内部昇任を行うものである。本研修は選出段階を含め、図1に示すように海外研修を含む6つのSTEPで構成されている。（詳細はHP 参照 <https://sentan-kyushu-u.ac.jp/>）

研修を通じて、国際通用性のある研究教育スキルが身につくとともに、将来上位職となった後に必要とされる幅広い知識の習得、女性男性ならびに文系理系教員の垣根を超えた学内ネットワークの形成、認定書付与による無意識のバイアスの排除が期待される。

2) 進捗状況

SENTAN-Qは初年度から表1に示す通り、毎年10名程度の研修生を選出している。現在1期生、2期生は2年間の研修が修了し、3期生及び4期生の研修が進行中である。各研修生はHP上で紹介している（本人の自己紹介動画あり。<https://sentan-q.kyushu-u.ac.jp/trainee/>）。各期の研修生の進捗状況は以下の通りである。

1期生：（研修期間2020年1月～2021年12月）、

2期生：（研修期間2020年8月～2022年7月）

1期生、2期生の20名が研修を無事修了し、出産・育児による10ヶ月の期間延長者（2022年10月修了）1名を除き、2023年1月までにテニュアトラック教員1名がテニュアを取得し、15名が1段階昇任している。このまま全員が昇任すると研修修了者から女性教授6名、女性准教授7名、男性准教授7名が誕生する。

修了生は研修期間内に実践的に身につけた研究力・教育力に加え、構築した海外とのネットワー

クを充実させ国際共同研究に取り組んでいる。また学内のリカレント教育で得た新たな知見と人的ネットワークにより、学際共同研究にも積極的に取り組んでいる。さらに分野の異なる研修生同士の連携で、地域社会向けのフォーラム（半農半アートフォーラム「文化からみる農ある暮らしの価値」）を企画するなど新しい取組みにも着手している。

3期生：（研修期間2021年8月～2023年7月）

3期生11名は、本年度前半はSTEP 4の留学生への実践的研究指導を海外のメンターのもと実践し、国際共著論文を作成した。またSTEP 4までの修了認定を受けたのち8月から最終試験であるSTEP 6に着手した。STEP 6では8週間以上海外渡航を含む海外大学での講義・研究指導を行い、次年度7月までに修了予定である。STEP 5の学内教員によるリカレント教育も、STEP 4と並行あるいはSTEP 6の海外渡航の帰国後に実施している。

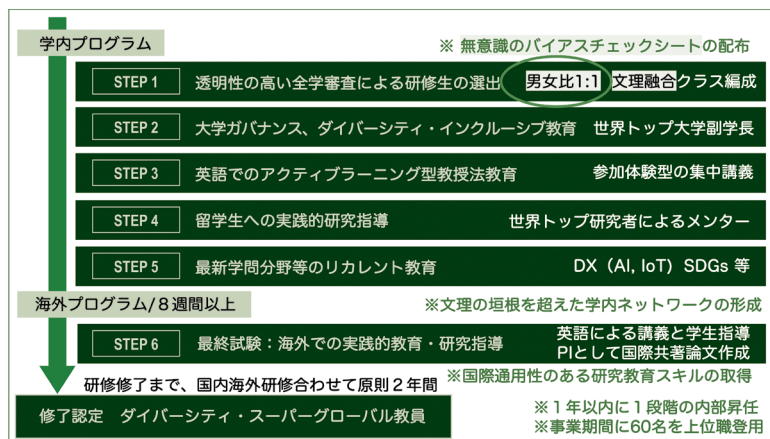


図1 SENTAN-Q 研修の6つのSTEP

表1 研修生内訳・進捗状況

2023年2月現在

1期	女性 8 : 男性 2
研修修了	
2期	女性 5 : 男性 5
研修修了	
3期	女性 4 : 男性 7
STEP5,6 実施中	
4期	女性 8 : 男性 2
STEP3,4,5 実施中	
合計	女性 25 : 男性 16

4期生：(研修期間2022年8月～2024年7月)

4期生10名は7月に選出され(STEP 1)、8月から研修を開始した。STEP 2では、第1回目のダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン教育で、イリノイ大学のSean C. Garrick副学長から“A Vision for Equity, Diversity and Inclusion”の講義を、続く第2回目の大学ガバナンス教育は、UC San Diego のSandra A. Brown 前副学長から“UC San Diego Overview of Research”の講義を受講した。

さらに2月及び3月にSTEP 3研修で、UC San Diegoの専門職員が講義を担当し、英語によるアクティブラーニング型教授法について学んだ。2023年2月現在、STEP 4研修及びSTEP 5研修を進めている。

4年目を迎えたSENTAN-Q研修の実施効果により、通常人事においても女性の上位職への登用は増加しつつある。SENTAN-Qの研修を通じ、性別、年代、職位を問わず、多様な人材が共に学ぶ、あるいはともに活動する機会を提供することで、大学研究者から無意識のバイアスを排除し、真に公平な大学環境の実現に繋がることが期待される。

2. 「調査分析」女性活躍指標に基づく女性研究者活躍促進に関する国際調査

本事業「調査分析」は、女性研究者の活躍促進に資する、海外の大学・研究機関等における優れた取組事例等の調査・分析を行う取組みに対する支援である。九州大学は、東京工業大学を共同実施機関として「女性活躍指標に基づく女性研究者活躍促進に関する国際調査」を提案し、2021年9月に採択され、2023年3月まで事業を実施する。

1) 目的と概要

本事業では、論文業績データの定量解析により得られた「女性活躍指標」に基づき、女性研究者活躍促進に関する大学部局の国際調査を実施する。データをもとに海外トップ大学との情報交換／調査研究を進めることで、女性研究者の活躍促進を阻む問題点を明確にし、その抜本的解決策を導き出すことを目指している。さらに九州大学と東京工業大学が連携することで、総合大学理工学部局と理工系大学との比較から、STEM (STEAM/STEMM) 分野の次世代女性研究者の採用・育成に関する問題を整理し、新たな突破口を見出すことを目的とする。

2) 特長と期待される成果

本事業の主な特徴は以下の通りである。

- ① 九州大学が2017年より特色型事業で実施しているエルゼビア社ジェンダーレポートに準ずる「男女別論文業績分析」[1,2]を踏まえた提案である。
- ② ジェンダー問題の対策を講じるのであればまずは「部局」から、という米国科学・工学・医学アカデミーの提言に基づく調査分析である。
- ③ 研究業績データは部局環境（人事選考・人材育成）を反映しているとの視点に立つて考察を加える。

以上のように海外のデータを国内データと比較することで、ダイバーシティ推進、特に若手女性研究者の採用と育成に関して日本の抱える問題の本質を明らかにする。

3) 進捗状況

九州大学で構築した論文業績分析手法を東京工業大学に技術移転し、九州大学は海外の総合大学

を、東京工業大学は海外の工科系大学を中心に業績分析とインタビューによる調査分析を実施した。その報告のシンポジウムを2023年3月24日に九州大学の伊都キャンパスで開催する。主な報告内容はHP又は本誌次号にて紹介する予定である。また、本事業で得られた知見の一部を理工系の学会誌で発表している [3,4]。

3. 今後に向けて

九州大学は2006年以降、研究とライフイベントとの両立支援、九大方式女性枠採用やSENTAN-Q研修及び「ダイバーシティ促進枠」による戦略的人事、さらに女性の活躍可視化などの種々の施策を講じ、女性が活躍できる研究教育環境の整備を推進してきた。それらの効果により2022年5月現在の女性比率は教員全体で16.3%（前年比+1.4%）、教授で7.6%（同+0.7%）に到達している。しかし、国立大学協会が掲げる目標（2025年までに教員全体の女性比率25%、教授女性比率20%）には程遠く、さらなる努力が必要である。

現在実施中の「先端型」事業SENTAN-Qは、女性の上位職の登用を直接に促進するものとして効果を上げつつあり、「調査分析」事業における国際調査は、部局単位の研究者の採用・育成に多く

の示唆を与える結果をもたらした。今後もこれらの活動・成果を糧に、研究環境のダイバーシティを促進するため、環境整備を積極的に推進していく所存である。

- [1] ポリモルフィア Vol.3, pp.33-37 (2018年3月) [ISSN 2424-1113]
- [2] ポリモルフィア Vol.4, pp.40-47 (2019年3月) [ISSN 2424-1113]
- [3] 表面と真空 65巻6号, pp.290-291 (2022年6月)
- [4] 表面と真空 66巻1号, pp.64-65 (2023年1月)

九州大学は
「九州大学ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修（SENTAN-Q）事業基金」
を創設致しました。詳しくはホームページをご覧ください。

九州大学基金ホームページ <https://kikin.kyushu-u.ac.jp/menu/pj.php#b>

